

注文の多い料理店

宮沢 賢治

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲を
かついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところ
を、こんなことを云いながら、あるいておりました。

「ぜんたい、こちらの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わ
ないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ」

「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、一三三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。
くるくるまわって、それからどたつと倒れるだろうねえ」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごついで、
どこかへ行つてしまつたくらいの山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いのので、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまい
を起こして、しばらく吠つて、それから泡を吐いて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、ちよつ
とかえしてみて言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ」と、もひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言
いました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じつと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云いました。

「ぼくはもう戻ろうとおもう」

「さあ、ぼくもちようど寒くはなつたし腹は空いてきたし戻ろうとおもう」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円も買って帰ればいい」

「兎もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこつた。では帰ろうじゃないか」

ところがどうも困つたことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっこうに見当がつかなくなっていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さつきから横つ腹が痛くてたまらないんだ」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな」

「あるきたくないよ。ああ困つたなあ、何かたべたいなあ」

「喰べたいもんだなあ」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云いました。
その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒いっけんの西洋造りの家がありました。
そして玄関げんかんには

RESTAURANT
西洋料理店
WILDCAT HOUSE
山猫軒

という札がでていました。

「君、ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか」
「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだろう」
「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか」

「はいろうじじゃないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れそうなんだ」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なもんです。そして硝子の開き戸がたって、そこに金文字でこう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」

二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。

「こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんぎしたけれど、こんどはこんないいこともある。このうちは料理店だけれどもただで馳走するんだぜ」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ」

二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。その硝子の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」

二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ」

「ぼくらは両方兼ねてるから」

「ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ」

そして二人はその扉をあけようとしていますと、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で」

「それはそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りにはすくないだろう」

二人は云いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はずいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい」

「これはぜんたいどういふんだ」ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきつと注文があまり多くて支度したくが手間取るけれどもごめん下さいと斯こういうことだ」

「そうだろう。早くどこか室へやの中にはいりたいもんだな」

「そしてテーブルに座すわりたいもんだな」

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長い柄えのついたブラシが置いてあったのです。

扉には赤い字で、

「お客さまがた、ここで髪かみをきちんとして、それからきもの泥どろを落してください」

と書いてありました。

「これはどうも尤もだ。僕もさつき玄関で、山のなかだとおもって見くびったんだよ」
「作法の厳しい家だ。きつとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ」

そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうつとかすんで無くなつて、風がどうつと室の中に入ってきました。

二人はびっくりして、互によりそつて、扉をがたんと開けて、次の室へ入って行きました。早く何か暖いものでもたべて、元氣をつけて置かないと、もう途方もないことになってしまうと、二人とも思つたのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸をここへ置いてください」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持ってものを食うという法はない」

「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい」

「どうだ、とるか」

「仕方ない、とろう。たしかによつぽどえらいひとなんだ。奥に来ているのは」

二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の中にはいりました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、
ことに尖ったものは、みんなここに置いてください」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあったのです。

「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。金気かなけのものはあぶない。ことに尖つたものはあぶないと斯こう云うんだらう」

「そうだらう。して見ると勘定かんじょうは歸りにここで払はらうのだらうか。」

「どうもそうらしい」

「そうだ。きつと」

二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな金庫のなかに入れて、ぱちんと錠じょうをかけました。

すこし行きますとまた扉とがあつて、その前に硝子がらすの壺つぼが一つありました。扉には斯こう書いてありました。

「壺のなかのクリームを顔や手足にすつかり塗ってください」

みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

「クリームをぬれというのはどういうんだ」

「これはね、外がひじょうに寒いだろう。室へやのなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきている。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ」

二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗ってそれから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたから、それは二人ともめいめいこっそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか」

と書いてあって、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。この主人はじつに用意周到しゅうとうだね」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、

「どうも斯うどこまでも廊下じゃ仕方ないね」
するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。」

十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に瓶びんの中の香水をよく振りかけてください」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へぱちやぱちや振りかけました。

ところがその香水は、どうも酔すのような匂においがするのでした。

「この香水はへんに酔すくさい。どうしたんだらう」

「まちがえたんだ。下女が風邪かぜでも引いてまちがえて入れたんだ」

二人は扉をあけて中にはいりました。

扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさんよくもみ込んでください」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどというこんどは二人ともぎよっとしてお互にクリームをたくさん塗った顔を見合せました。

「どうもおかしいぜ」

「ぼくもおかしいとおもう」

「沢山たくさんの注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人にたべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家うちとこういうことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……」がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。

「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ」がたがたがたふるえだして、もうものが言

えませんでした。

「遁げ……」がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押そうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあつて、

「いや、わざわざご苦労です。

大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはいりください」

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉がこつちをのぞいています。

「うわあ」がたがたがたがた。

「うわあ」がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

すると戸の中では、こそそこそこんなことを云っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう、お気の毒でしたなんて、間抜けたことを書いたもんだ」

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けて呉れやしないんだ」

「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがはいつて来なかつたら、それはぼくらの責任だぜ」

「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっしやい。いらっしやい。いらっしやい。お皿も洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけです。はやくいらっしやい」

「へい、いらっしやい、いらっしやい。それともサラダはお嫌いですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらっしやい」

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のようになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

中ではふつふつとわらつてまた叫んでいきます。

「いらつしゃい、いらつしゃい。そんなに泣いては折角のクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。じきもつてまいります。さあ、早くいらつしゃい」

「早くいらつしゃい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもって、舌なめずりして、お客さま方を待つていられます」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのときうしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ」という声が出て、あの白熊のような犬が二疋、扉をつきやぶつて室の中に飛び込んできました。鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、犬どもはうとうとうなつてしばらく室の中をくるくる廻つていましたが、また一声「わん」と高く吠えて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。

その扉の向うのまつくらやみのなかで、

「じゃあお、くわあ、ごろごろ」という声が出て、それからがさがさ鳴りました。

室はけむりのように消え、二人は寒さにふるふるふるえて、草の中に立っていました

た。

見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あっちの枝にぶらさがったり、こっちの根もとにちらばったりしています。風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

犬がふうとうなつて戻ってきました。

そしてうしろからは、

「旦那あ、旦那あ」と叫ぶものがあります。

二人は俄かに元気がついて

「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い」と叫びました。

箕帽子をかぶった専門の猟師が、草をざわざわ分けてやってきました。

そこで二人はやっと安心しました。

そして猟師のもつてきた団子をたべ、途中で十円だけ山鳥を買って東京に帰りました。

しかし、さつき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりになおりませんでした。